磨いたビルの窓ガラス　45万枚以上

凄腕（すごうで）つとめにん

下降イメージ反復 恐怖克服

エコル
高所作業チーム課長
清水 篤史さん（33）

「作業中は絶対に中をのぞかない」「チームで作業」が鉄則。ブランコに座っている時の感覚は「ハンモックに乗っているかのよう」だという＝東京都台東区、高波淳撮影

あのときも空中にいた。

地上約40㍍、東京の高層ビルの13階付近。ゴンドラに乗って窓ガラスを磨こうとした瞬間、窓がコンニャクのように、ゆらゆら波打つように見えた。同僚が「地震だ」と叫んだ。東日本大震災がおきた昨年3月11日。あわてて、でも慎重に地上に戻った。

オフィスビルやマンションの窓ガラスの掃除、照明の交換など、高所作業を手がける。40階建てだろうと、地上100㍍の屋上から30㍍のびるハシゴの先だろうと、難なくこなす。「高いけれど、作業自体は危険ではないんです」と言い切る。

窓ふきでは、屋上のフックからワイヤでつるされたゴンドラや、屋上から垂らしたロープとつながる幅15㎝、長さ50㎝、厚さ5㎝しかない、木製のブランコが仕事場になる。

屋上の「へり」から乗り、上の階から順番に磨く。上から下へ、が基本。水滴は下に飛び散りやすいからだ。ゴンドラは機械でワイヤを巻き取って上下するが、ブランコならば、まるで登山家のように、自分でロープの長さを調整しながら降りていく。屋上とつなぐ命綱とロープが絡まぬよう、注意を払う。

窓についたらガラスをモップでふき、「水切り」でぬぐって磨く。大きさで異なるが1㎡だと1枚30秒前後かかる。1日平均100枚以上。これまで少なくとも45万枚は磨いたという。

休憩を挟み、1日の作業は通算7時間に及ぶこともある。足元を風が吹き抜け、突風で体が2㍍近く揺れることも珍しくない。バランスがとりにくく、中ぶらりんのために力のいれ具合も難しい。窓が突然開いてヒヤリとする時もある。

それでも「遠くを見わたせる爽快感がすばらしい。仕事がストレス解消になるんです」。

もちろん事前チェックは欠かさない。ロープは傷んでいないか。天気予報は。海の近くやビル街は、特殊な風がふく。いまでは地形を見てどんな風がふくか、察しがつくようになった。

最初は違った。18歳の時、アルバイト情報誌で掃除の仕事を知り応募。高所作業とは知らなかった。地上の安全保守などを1年やった後、5階建ての建物の作業を命じられた。恐怖体験以外の何物でもなかった。

都内のロッククライミングの練習場に行ったり、屋上から下に降りるイメージを、寝る前などに何度も思い浮かべたりして克服しようとした。半年ほどで「朝起き、歯磨きするのと同じ感覚」でこなせるまで慣れた。

あるとき先輩の勧めで、ガラス磨きの腕前を競う全国大会に出た。速さと仕上がりの美しさが勝負。数カ月前から、あいた時間にひたすらふいた。先輩はつきっきりで技術を教えてくれた。ふいているだけで楽しかった。打ち込めるものをずっと探していた。これだと思った。

大会では優勝候補のその先輩を破ってチャンピオンに。腕と仕事ぶりが認められ、3年後には正社員に採用された。最近、思うことがある。「大会は勝ち負けだけど、仕事は勝ち負けじゃない。楽しめるか、感謝できるか、じゃないでしょうか」

最後に、家庭での窓掃除のコツは？　「かたくしぼった雑巾で汚れを落とし、仕上げに、眼鏡ふきのような目の細かい布巾でふくことです」　（石山英明）

しみず・あつし　岐阜市生まれ。東京にあこがれ、高校卒業後に上京。面接に出向いた外装工事・清掃業の「エコル」（東京都文京区）の事務所に、高所作業の様子を描いたポスターがはってあり、青くなった。「面接やめますとは言えず、今に至っています」